

2026 年度大学入学共通テスト 解説〈公共、倫理〉

第1問

解説

問1

正解は a と d。

生徒 A のメモについて、公助とは、災害発生時に地方自治体・警察・消防などの公的機関が行う救助・援助のことである。したがって、a のように地方自治体の担当部署が心のケアの相談窓口を開設することは公助にあたる。b のように住民が食料を相互に持ち寄って飢えをしのぐことは共助にあたる。

生徒 B のメモについて、ロールズが唱えた「公正としての正義」の原理の一つである「格差原理」とは、不平等は、最も不遇な立場の人々の状況を改善できる場合にのみ正当化されるとする原理である。したがって、d のように最も不遇な立場の人々の状況が改善される社会保障制度を構築することは格差原理に該当する。c のように最大多数の人々が利益を受ける社会制度を構築することは、ロールズが批判した功利主義の考え方と相当する。

問2

正解は「ア」—付加価値、「イ」—イノベーション、「ウ」—所得税。

アに入るのは「付加価値」。付加価値とは、生産額から原材料や燃料などの中間投入物の価格を差し引いて算出された額であり、GDP（国内総生産）とは一国内で一定期間内に生み出された付加価値の合計である。したがって、GDP の値が大きくなるほど付加価値の合計は増加する。

イに入るのは「イノベーション」。イノベーションとは「技術革新」という意味の言葉で、新しい技術の導入や管理・経営の変革などを通じて企業が供給の質を高め、経済の発展をもたらすことを指す。

ウに入るのは「所得税」。累進課税とは、所得が高くなるにつれて税率が高くなる税のこと。所得税には累進課税制度が適用されている。

問3

正解は②。

②は正文。スウェーデンの一般政府拠出は 16.2% である一方、合計の 50% は $30.4\% \times 0.5 = 15.2\%$ と算出できる。したがって、合計に対する一般政府拠出の割合は、50% を超えていると理解できる。

①は誤文。フランスの一般政府拠出は 16.2%，事業主拠出と被保険者拠出の合計は 18.9%，ドイツの一般政府拠出は 11.6%，事業主拠出と被保険者拠出の合計は 21.7% なので、どちらの国においても、事業主拠出と被保険者拠出を合わせた数は一般政府拠出の数値よりも高い。

③は誤文。日本の被保険者拠出は 7.2% である一方、合計の 40% は $25.4\% \times 0.4 = 10.16\%$ と算出できる。したがって、合計に対する被保険者拠出の割合は、40% を下回っていると理解できる。

④は誤文。日本の場合、事業主拠出は 7.0%，被保険者拠出は 7.2% なので、被保険者拠出の数値の方が高い。

問 4

正解は「ア」一誤、「イ」一正。

アは誤り。国民健康保険は医療保険の一つであり、医療保険は社会保険に区分される。しかし、国民健康保険の対象となるのは、健康保険や共済組合に加入していない自営業者などの一般住民に限られる。したがって、考え方 X のようにすべての人に対して無条件に提供されるサービスとは言えない。

イは正しい。生活保護は公的扶助に区分され、生活困窮者を対象として最低限度の生活を保障し、自立を助長することを指す。したがって、考え方 Y のように一定の要件を満たす人に対して提供されるサービスと言える。

第 2 問

解説

問 1

正解は「ア」—b, 「イ」—e。

アに入る語句は b の「エスノセントリズム」。自分の文化や政治・経済の優位を主張して誇示する考え方はエスノセントリズム（自民族中心主義）と呼ばれる。互いの文化を尊重し、異質な文化を持つ人々との共生をめざす多文化主義や文化相対主義とは反対の考え方である。

イに入る記述は e。世界遺産に登録されることに価値を見いだし、世界遺産登録が多い国の文化は少ない国の文化よりも優れていると考えることは、世界遺産という特定の基準が持つ権威に依拠して文化を評価し、序列づけることだと言える。

問 2

正解はイ。

イは正文。資料 1 より、2014 年末と 2024 年末の数値を比較したとき、ベトナムの増加人数は 534 千人であり、上位 7 か国中で最も多い（中国は 218 千人、韓国は -56 千人、フィリピンは 124 千人、ネパールは 191 千人、ブラジルは 37 千人、インドネシアは 170 千人）。また、資料 2 より、ベトナムの在留資格別割合のなかで最も高いのは「技能実習・特定技能」である。

アは誤文。資料 1 より、2024 年末時点での中国・ベトナム・韓国の在留外国人合計は 1916 千人であり、在留外国人の総数 3769 千人の半数（1884.5 千人）を超えている。しかし、資料 2 より、在留外国人全体における在留資格別割合で最も高いのは、「永住者・定住者」である。

ウは誤文。資料 1 より、2019 年末と 2024 年末の数値を比較したとき、インドネシアの増加率は約 198.5% であり、上位 7 か国中で最も多い（中国は約 7.2%，ベトナムは約 53.9%，韓国は約 -8.3%，フィリピンは約 20.8%，ネパールは約 140.2%，ブラジルは 0%）。しかし、在留資格別割合で「永住者・定住者」が最も高いのはブラジルの約 90% である（インドネシアの割合は約 5%）。

問 3

正解は①。

①は誤文。津地鎮祭訴訟について、三重県津市が市立体育館の起工式における神道の地鎮祭の費用を公費から支出したことが問題となり、最高裁は合憲判決を下した。

②は正文。愛媛玉ぐし料訴訟について、愛媛県が靖国神社や県の護国神社に公費から玉ぐし料を支出したことが問題となり、最高裁は違憲判決を下した。

③は正文。空知太神社訴訟について、北海道砂川市による神社への市有地の無償提供が問題となり、最高裁は違憲判決を下した。

④は正文。那覇孔子廟訴訟について、孔子廟のために市有地の使用料が免除されたことが問題となり、最高裁は違憲判決を下した。

問 4

正解は「ア」一年中行事、「イ」一捉え方 Y。

アに入るのは「年中行事」。年中行事とは、暦に従って毎年繰り返される伝統的な行事のこと。初詣・節分・雛祭り・盆などがこれにあたる。

イに入るのは捉え方 Y。B の友人がマンガに感化されて生きる指針を得て、世の中の見方が大きく変化したことは、捉え方 Y のように宗教を「人生に究極的な意味や新たな視点への転換をもたらすものである」と考える捉え方に通じると言える。

第 3 問

解説

問 1

正解は①。荀子は、人間の生まれつきの本性は悪であるという性悪説を説き、古代の聖王などによって人為的に定められた社会規範である「礼」に基づく教育によって人間の本性は矯正されると説いた。

②は不適。エラスムスは『自由意志論』で、キリスト教人文主義の立場から人間の持つ自由意志を肯定した。人間は原罪を負っているがゆえに、その自由意志は神から離反して罪を犯さざるを得ないものだと捉えたのはルターである。

③は不適。マキアヴェリは『君主論』で、国家統治という目的のためには、君主は暴力や裏切りなどの反道徳的な手段を用いることも許されると説いた。

④は不適。王陽明が創始した陽明学では、主体的な心の活動から客観的な理が生まれると考えられた。善惡の分別は心に先立ってあるのではなく、むしろ生き生きとした良知の働きから、具体的な場面においてその時々に生み出されるものであるとされる。

問 2

正解は③。グロティウスは自然法が人間の本性に根差した、人類普遍の原理であると説いた。

①は不適。預言者であったイザヤは、イスラエル王国において行われていた、ヤハウェ以外の神々への信仰を宗教的堕落と捉え、厳しく批判した。

②は不適。スーフィズムでは禁欲的な修行により自我を脱することや、無我の境地における神との神秘的合一が求められた。「ジハード」は異教徒との戦いを意味するイスラーム教の概念である。

④は不適。ルソーの社会契約説において、公共の利益を目指す、万人に共通する意志が一般意志である。これは私的な利益を求める特殊意志や、その総和としての全体意志とは異なる。

問 3

正解はア—「魂に配慮し、自他のあり方を吟味する」、イ—「自分の魂を劣悪にする」。

ソクラテスは自らの魂に徳が備わるように気遣い、人間の本質としての魂をより優れたものとするなどを説いた。そのため、脱獄を勧められても、それが不正であり、自分の魂を害することを理由に応じなかつた。

問 4

正解はア—ニーチェ、イ—ヒューム、ウ—フロイト。

アはニーチェ。ニーチェはキリスト教的道徳における同情・平等・博愛には、弱者の強者に対する反感・嫉妬・憎悪といったルサンチマンが隠されていると考え、これを奴隸道徳であると主張した。

イはヒューム。ヒュームは経験論の立場を徹底させ、人間は知覚された経験を超えて何かを知ることはできないと考えた。そして、経験を超えた事柄について判断する理性の権能を否定した。

ウはフロイト。精神分析学を創始したフロイトは、無意識における欲望の湧出を、社会的道徳を取り入れた超自我が監督し抑圧していると考えた。

問 5

正解は③。「幼稚園で子どもが大きな声を出して遊ぶことは、教育上有効である」という「信念」が一致していたとしても、その賛否について「態度」の不一致が生じることは十分にあり得る。

①は不適。この場合、騒音に対して対処すべきかどうかという判断は、信念と態度、双方に基づくものだと考えられる。例えば、信念とは「子どもの声は騒音である」といったものであるのに対し、態度とは「許せない」「受け入れたい」などそれに対する賛否である。

②は不適。子供の大きな声を苦痛に感じる人々は、教育的効果を事実として認めた上で、否定的な態度を取っている可能性がある。「授業資料」の最後の一文にある通り、信念が一致したとしても態度が一致しない場合があるためである。

④は不適。「授業資料」の第3段落1文目にあるように、態度の異なる相手に自らの判断を述べることは、相手の感情に働きかけて態度を変えさせることを目的とするものであり、これによって態度が変化することはありうると考えられる。

問 6

正解はア一正、イ一正、ウ一誤。

アは正文。アウグスティヌスは、神が恵む無償の愛である恩寵によってのみ、原罪を背負う人間は救われると考え、内省の形而上学ともいべき自己探究・神探究を遂行した。

イは正文。モンテニュは人間の独善的で狭量な心や、他国の思想や文化への不寛容が、戦争や残虐な事件をもたらしたと批判した。そこで彼は「私は何を知っているのか」(ク・セ・ジュ)をモットーに、常に疑い、独断を避け、より深い真理を探求する懐疑主義に立った。

ウは誤文。カントは自らの理性が命じる道徳法則に基づき、行為の結果ではなく、義務のみを動機として行動することに道徳的な善があると考えた。

問 7

正解は④。資料1は、自らの善い行為によって、自らを浄め、善の道を歩むことを説いている。これに対して資料2は、世俗的な悪の道である煩悩の道に生きながらも、それに染まることなく、

自らの本性たる善の道、仏陀の法を歩むことを説いている。「輪廻」「善惡の区別」「他者の救済」はいずれも資料 1 と 2 のテーマではない。

問 8

正解はア—「活動」、イ—「実存的交わり」、ウ—「愛しながら戦う」。

アは「活動」。『人間の条件』のなかでアーレントは人間の行為を「労働」「仕事」「活動」に分けた。このうち「活動」は私的利害の束縛から解放され、政治の公的な空間で自由に話し合い、言葉で相手を動かして共同体を形成する行為である。

イは「実存的交わり」。ヤスパースの哲学の中心概念で、真の自己を目指すもの同士が、互いに包み隠さずに自己を探求し、吟味し合うことを通じて、実存としての自己を理解することを意味する。

ウは「愛しながら戦う」。実存的交わりは、愛と孤独の両極を揺れながら真の自己を獲得するための真剣な出会いであり、愛しながらの戦い（愛の闘争）とも呼ばれる。

問 9

正解はア—「論理だけではなく感情にも」、イ—「J.S.ミル」、ウ—「自覚がないままに加担してしまう悪」。

アは「論理だけではなく感情にも」。場面 2 では、生徒 H が「理屈と感情のどっちが大事かという話ではなくて、どっちも大事」と述べていることから、「論理だけではなく感情にも」が適切。

イは「J.S.ミル」。ミルはベンサムの功利主義を継承しつつもその量的な快楽計算を批判し、利他的感情を満たすところに幸福を求める、理想主義的かつ人格主義的な功利主義を提唱した。その際、道徳的義務に背く行為については、良心から生ずる苦痛が内的制裁を与えるのだと考えた。

ウは「自覚がないままに加担してしまう悪」。場面 3 で「自覚がないまま悪に加担している状態」について生徒 H が論じていることから判断できる。

第 4 問

解説

問 1

正解はア—「世俗といたずらに衝突せず、しかしそこに埋没しきることもなく、社会の現実との矛盾を生きていくべき」、イ—「諦念」。

森鷗外の文学には諦念（レジグナチオン）という特徴が見出される。これは個人と社会の葛藤において、やみくもに自己を貫くのではなく、自己の置かれた立場を見つめ、運命を受け入れることによって心の安定を得る立場である。

問 2

正解はア—源信、イ—阿弥陀仏、ウ—觀想念仏。

アは源信。厭離穢土・欣求淨土のための教えをまとめた書である『往生要集』を著したのは源信。

イは阿弥陀仏。淨土教において、死後に極樂淨土へと往生するために信仰されたのは阿弥陀仏。

ウは觀想念仏。源信が説いた念佛は、仏の姿や功德を思い浮かべる觀想念仏が中心であった。專修念佛を強調したのは法然。

問 3

正解はア—「おだやかで従順な」、イ—「恵み豊かだが暴威も振るう」、ウ—「受容的」。

和辻哲郎の風土論において、和辻は三つの類型としてモンスーン・砂漠・牧場を挙げ、それぞれアジア・中東・ヨーロッパを典型例とした。アジアに代表されるモンスーンでは、生が充溢して恵みを与える一方で、その荒れ狂う混沌は人を圧迫する。そこで人は受容的・忍従的な態度と汎神論的な神を持つ。他方で中東に代表される砂漠は、生が皆無であり死の脅威によって人を圧迫する。そこで人は少なき生を求め、唯一絶対の神のもとで対抗的・戦闘的な態度を持つ。さらにヨーロッパに代表される牧場においては、自然は無でも混沌でもない中庸的な存在を保ち、人が制御しやすいかたちを露わにする。以上を踏まえると、ヨーロッパはおだやかで従順な自然環境、日本は恵み豊かだが暴威も振るう自然環境、そしてその影響下で生まれるのは受容的な態度であるといえる。

問 4

正解は②。赤穂浪士の討ち入りについて、荻生徂徠は「義」よりも幕府の法と秩序を重んじる立場から、仇討ちを不義と解した。

問 5

正解は④。坂口安吾は、人間が人間本来の姿に戻ることを「堕落」と呼んだ。資料の「墮ちる道を墮ちきる」というのはこの主張に基づくもので、その上で「自分自身の武士道、自分自身の天皇」すなわち新たな価値基準や権威を作り上げることを説いた。

第 5 問

解説

問 1

基本感情として適当でないものは嫉妬。エクマンにおける 6 つの基本感情は、喜び・怒り・悲しみ・驚き・嫌悪・恐怖である。

問 2

正解は①。感情の二要因説は、身体反応をどのように解釈するかによって感情の経験が決まるという説であり、同じ身体の反応から異なる感情が生じることを説明できる。本問の場合、身体反応は、滑稽な振る舞いを見たことによる心拍数・呼吸数の上昇である。正しい情報が与えられた通知条件下においては、これは「楽しさ」ではなく飲料の副作用であると解釈されることから、「楽しい気分」の程度は、認知的な解釈に寄与する情報が通知されない非通知条件や、真逆の情報が与えられる誤情報条件よりも相対的に低いと考えられる。

問 3

正解は②。教育効果向上のために生徒の授業集中度のデータ収集やその AI 解析が行われていることについては、プライバシーの権利の観点から問題が指摘されている。

①は不適。医学研究のために AI が学習する、遺伝や病歴などの情報は個人情報保護法の適用範囲である。

③は不適。家畜の飼育データは一部の農業・畜産業において AI を用いて解析されている。

④は不適。AI は学習するデータによって偏見（バイアス）を有することが知られており、有色人種が逮捕されやすくなるなど、人種差別的な犯罪捜査の例も報告されている。

⑤は不適。自動運転技術を発展させるため、公道での実験が行われている。

問 4

正解はイと力。BMI の使用については、ハッキングなどによる個人情報流出が生じうるという倫理的問題が指摘されている。また BMI を含む能力増強技術に関しては、これが他の技術同様高価なものとなることが予想される以上、新たな経済格差を生じさせるリスクが指摘されている。そのため、こうした技術には公平なアクセスが与えられることが重要である。

問 5

正解は a—イ， b—ア。脳の情報収集・活用を，国は積極的に行うべきとする立場は，「情報をもとにしたサービスや知見にアクセスできるようにすることで，国民は格差なく恩恵を受けられる」という観点から支持することができる。他方で脳の情報収集・活用について，国は最大限慎重にすべきという立場は，「プライバシーの権利」や個人情報保護の観点から支持することができる。

第 6 問

解説

問 1

正解は①。ノージックの「最小国家」論などのリバタリアニズムにおいては、個人が最初から正当に所有していたものと、正当に譲渡されたものを所有する正義が万人に付与されているという権原理論が展開されており、政府は社会全体の福祉のためであっても個人の所有物を取り上げるべきではないとされている。

問 2

正解は②。シュヴァイツァーは、あらゆる生物の生命を神秘的な価値あるものとして尊ぶ生命への畏敬を説いた。

①は不適。ピーター・シンガーが人間と動物を平等とみなした根拠は、「幸福・苦痛を享受する能力」においてであり、「生きているという点」ではない。

③は不適。フラーが提唱してボールディングらが広めた「宇宙船地球号」は、地球を宇宙船のように閉ざされた環境にたとえたものである。

④は不適。ウェーバーは近代的理性による自然についての客観的認識が進むとともに、神の超自然的な力に働きかける呪術が廃れたことを「脱呪術化」と呼んだが、自然搾取への批判を展開したわけではない。

問 3

正解はウとエの組合せ。

ウ、エは適切。「世代間倫理」は、現在の世代が未来の世代の生存可能性に対して責任を有するという論点を意味する語である。また「生物多様性」の観点から気候・気象制御技術をとらえ直すと、人間以外の生物種の存続が懸念されると考えられる。

アは不適。「共有地の悲劇」は、自然科学ではなく、人間の価値観や道徳思想に関する価値判断を伴う分野において、技術的方法ではなく道徳的方法で解決するべきだとハーディングが論じた際に用いられた比喩だが、ここで問題となるのは「共有資源を各主体が自分の利益のために使いすぎる」ことであり、各国間の格差ではない。

イは不適。「地球規模で考え、足元から行動を」(Think globally, Act locally) は、文字通り身近なことから解決に取り組むことを意味する。「国境を越える問題だから国際政治の場で慎重に対応すべき」という主張は、「ローカルに行動する」という趣旨に反している。

問 4

正解は③。カーソンは DDT などの有機塩素系農薬と殺虫剤の大量使用による生態系破壊を警告した。「環境に適合できるかどうかが不明である」は最後の 2 行から読み取れる。

- ①は不適。「生命が原理的に人工的合成物に適合できない」という断定はなされていない。
- ②は不適。「生命が人工的合成物に適合できる」という主張は展開されていない。
- ④は不適。自然界の働きが「生命を破壊する」ものであるとは述べられていない。

問 5

正解はア—c, イ—d, ウ—h。

アは c（人間は魚によって養われているという感覚を有していた）が当てはまる。会話文によれば、漁民たちは魚介類の汚染に気づいていながらそれを食べ続けたとされており、こうした行動の理由付けとしては c が最もふさわしい。

イは d（人間は生態系という共同体の構成員にすぎない）が当てはまる。空欄イの前後の「レオポルドの「土地倫理」と似て」いるという記述より、この空欄に入るべき内容は、「生態系の総体に対し、人間はその一員として愛情・尊敬の念を持つべきだ」といった考え方であることがわかる。

ウは h（経済的尺度では測れない価値を生態系に認めること）が当てはまる。レオポルドと緒方はいずれも、土地や生態系など、人間以外のものとの共生を説いており、その価値を認めている。またこうした方向性は、空欄ウの直前の N の発言にある「命を金銭に換算する補償金制度では命そのものに向き合うには不十分」という記述とも合致する。なお、g の「持続可能な開発」は 1992 年の地球サミットで提示された考え方であり、レオポルドや緒方の時代のものとは異なる。